

歴史的人格との出会い

— “柳生” をめぐる武道・歴史・社会—

玉 城 毅

キーワード 歴史的人格・柳生新陰流・エージェント・社会的パーソン

目次

- I はじめに
- II 柳生の里について
 - 1 柳生の里の概況
 - 2 文献資料と“柳生”の表象
- III 柳生一族の展開と柳生新陰流
 - 1 戦国時代と柳生宗厳（石舟斎）
 - 2 柳生宗矩
 - 3 柳生十兵衛三厳
 - 4 柳生兵庫助利厳
 - 5 近代の江戸柳生家と尾張柳生家
- IV 武道と社会
 - 1 芳徳寺の再興と武道の復興：橋本定芳氏の足跡
 - 2 近年の動き
- V 歴史的人格とネットワークの形成
 - 1 歴史的人格とエージェント
 - 2 エージェントと社会的パーソン
 - 3 歴史的人格と柳生の里
- VI おわりに

I はじめに

歴史上の人物が現在に生きる人びとの共感を呼ぶことがある。法然・親鸞・日蓮といった宗教者、柳生十兵衛や宮本武蔵といった剣豪、坂本竜馬や西郷隆盛といった幕末志士などがその例である。彼らは、歴史研究者のみならず小説家の関心を惹くことが多く、また彼らの行為や思想は、時代を超えて人々に影響を与えることもある。過去を振り返って焦点化され、現在に生きる人びとに記憶されて影響力をもつ人物をここでは「歴史的人格」と呼ぶことにする¹⁾。

本稿の目的は、歴史的人格と現在に生きる人びとの関係を検討することである。具体的には奈良市にある柳生の里をとりあげ、そこに発祥した柳生新陰流という古武術とそれに関わる人びとに着目する。“柳生”の名称は、人名（柳生宗矩や十兵衛）・古武術の一派（柳生新陰流）・地名（柳生町）という三重の意味をもつ名称である。ここから、人・武道・地域社会が関連していることが想像できるが、これらの関連性を歴史的に捉えて明らかにすることが本稿の基本的なテーマである。

歴史的人格をめぐる問題は、社会の中の「人」をどう捉えるかというより大きなテーマにつながっている。人格 (person) と自己 (self) という長く議論されてきたテーマ [モース 1995; Fortes 1987; Jackson and Karp 1990; 中川 2001]、とりわけ、近年のエージェンシー（行為主体性）に関わる議論 [田中 2005、2006] が本稿のテーマとして重要である。歴史的人格は、歴史生成を刺激し誘発する存在であったがゆえに人々に記憶されるようになった存在であり、また、歴史的人格に出会った人は、自ら主体的な実践を始めることがあるからである。結論を先取りしていえば、歴史的人格と現在に生きる人々の関係は、エージェント（行為主体）を生み出す契機であり歴史生成の局面とみることができると筆者は考えている。

このような問題意識の下、「Ⅱ」で柳生の里と、これまでになされた柳生の里に関する表象について概観し、「Ⅲ」と「Ⅳ」では、戦国時代から現在にかけて伝承されてきた柳生新陰流の歴史的展開過程をその担い手を中心に叙述する²⁾。これを踏まえて、「Ⅴ」で歴史的人格と現在に生きる人々の関

係について、エージェント論や人格論を参考にしながら考察したい。

Ⅱ 柳生の里について

1 柳生の里概況

奈良市柳生地区は、奈良県北東部に位置し、東西約6km、南北約8km、面積21.89km²を占める地域である。北は京都府笠置町飛鳥路に、東は京都府相楽郡南山城村高尾と奈良市月ヶ瀬桃香野に、南は奈良県山辺郡山添村桐山・室津と奈良市水間に、西は奈良市坂原町と大柳生町に接している。海拔は200m～600m、大部分は山地で耕地は6分の1ほどである。柳生地区の東端、西端、中央のそれぞれに3つの山脈が南北に連なり、南北に延びる2つの谷間に今川と布目川が南から北に流れている。西の今川に沿って北から大保町、柳生町、柳生下町、東の布目川流域に北から北野山町、邑地町、興ヶ原町があり、大保町と北野山町の間に丹生町がある。これらの7町が柳生地区である。柳生地区公民館や小・中学校がある柳生町は、奈良市街地（県庁）から約16km、車で約50分の距離にある。

柳生地区の7町の人口・世帯構成（2008年5月1日現在）は次表の通りである。

柳生地区の人口(2008年5月1日現在)

町名	世帯数	人口	男	女
【柳生地区】	462	1,363	656	707
柳生町	96	283	131	152
柳生下町	86	167	86	81
興ヶ原町	46	157	77	80
邑地町	112	353	169	184
大保町	41	134	63	71
丹生町	61	200	100	100
北野山町	20	69	30	39

この中で、江戸時代の柳生藩の中心であった「柳生の里」は、柳生村（現柳生町）・柳生下村（現柳生下町）・大保村（柳生村の枝村、現大保町）である。柳生陣屋や柳生藩国家老の小山田家屋敷は柳生村にあった³⁾。

2 文献資料と“柳生”の表象

奈良県立図書館情報館の資料検索システムで“柳生”を検索すると、121件

論文

の図書が抽出される。これから“大柳生”の文献を引いて“柳生”だけに絞り込み、さらに、図書分類（日本十進分類法）の基準で件数を整理すると表のようになる⁴⁾。

“柳生”関係図書の分類

大分類	件数	中分類	件数
総記	2	叢書・全集・選集	1
		貴重書・郷土資料・その他の特別コレクション	1
哲学	1	仏教教理・仏教哲学	1
歴史	46	日本史	4
		近畿地方	9
		系譜・家史	8
		個人伝記	5
		地理・地誌・紀行	20
社会科学	1	古代兵法・軍学	1
芸術	9	参考図書	1
		仏像	1
		日本画	1
		写真集	1
		武術	5
文学	60	文学史・文学思想史	1
		詩歌	1
		小説・物語	53
		作品集	5
合計	119		119

223世帯・584人が住む柳生の里（柳生町・柳生下町・大保町）に関連する文献がこれほど多数あることにまず驚く。これらの文献の内訳でまず目を引くのが、文学－小説・物語の53件である。そのほとんどは、戦国時代から江戸時代にかけての柳生一族に関わる小説である。代表的なものとして、山岡荘八（1907－1978）の『柳生一族』や『柳生宗矩』（後にNHKの大河ドラマ「春の坂道」としてドラマ化）、五味康祐（1921－1980）の『柳生武芸帳』や『柳生十兵衛』などがあげられる。近年も、多田容子（1971－）が柳生十兵衛を主人公として描いた『双眼』（1999）や『柳生平定記』（2006）などを著している。この半世紀を通して、柳生や柳生一族は、小説家の関心を惹き続けてきたといえる。

多くの小説が描かれる一方で、社会科学や歴史の文献は多いとはいえない。「地理・地誌・紀行」の20件が目目を引くが、そのうちの14件は地図であり研究書ではない。柳生の里を対象にした調査研究は、盛んになされてきたとはいえない。とはいえ、柳生新陰流や柳生の里に関する歴史・社会・文化に

ついて、精力的に調査研究した人々も少数ながら存在する。これらの研究には、職業的研究者による研究と地元住民による地域史研究がある。

職業的研究者による代表的なものは、今村嘉雄編 1967『史料柳生新陰流』（上巻・下巻）と、これを下敷きにした今村嘉雄 1971『定本大和柳生一族：新陰流の系譜』があげられる。近年では、清水博 1996『生命知としての場の論理：柳生新陰流に見る共創の理』、赤羽龍雄 1998『徳川将軍と柳生新陰流』、赤羽根龍雄 2006『江戸武士の新陰流 柳生巖周伝の研究』などがある。これらの研究は、柳生一族や、柳生一族で伝承してきた柳生新陰流に着目したものである。

地元住民による柳生研究でも、柳生新陰流は重要な要素であるが、彼らの研究は、柳生の里の歴史・社会・文化の全般を扱っており、柳生の里に関わる全ての事柄を記録に留めようとする意志が感じられるものである。古くは、杉田定一 1923 - 1926『柳生藩舊記；柳生氏六百年史；柳生の研究：古文書篇；古文書・古記録・遺物遺跡を基礎としたる柳生六百年史』がある。この書物は、和紙に手書きされた原稿であり、奈良県立図書情報館が所蔵している。また、芳徳寺の前住職橋本定芳は、柳生家や新陰流に関する史料を精力的に収集し、芳徳寺が所蔵し、一部展示している。彼らが収集した史料は、後に、柳生村史編集委員会編 1961『柳生のさと 村史』、山田熊夫 1971『柳生の里』、柳生観光協会編 2000『新版・柳生の里（花と剣聖の里）』に活用された。

杉田定一氏や橋本定芳住職の意志と熱意を受け継ぐ地元の研究者として、柳生町・八坂神社の宮司を勤める石田武士氏がいる。彼は、柳生の歴史資料の収集に励む傍ら、自らも柳生の移り変わりを見つめて記録してきた。彼が収集した柳生関係の史料と自らが書き記した記録は、手書き原稿 300 頁余りを 1 巻として、全 9 巻の資料集『柳生古語拾遺』（1965-1978）としてまとめられている⁵⁾。

次節では、先学の熱意によって収集・記録されたこれらの文献資料を参考にして、柳生一族と柳生新陰流の歴史を祖述する。

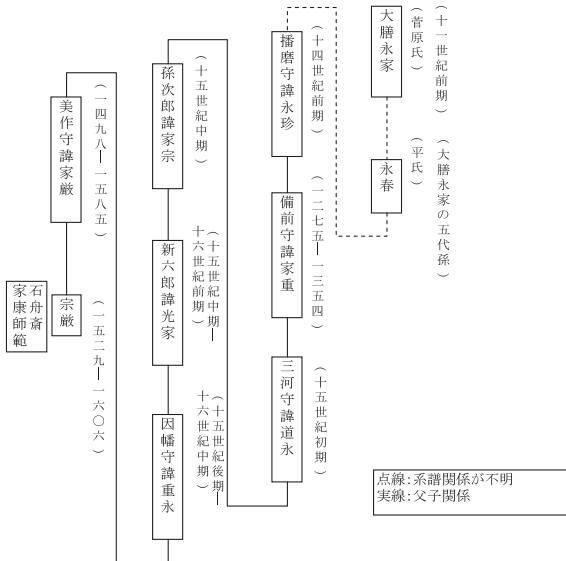
Ⅲ 柳生一族の展開と柳生新陰流

柳生宗矩が1万石を所領して大名になって以降、柳生一族の地位は確固たるものになっていった。近世以降の柳生一族の展開の主要因は、彼ら兵法の卓越さにあった。その基盤を築いたのは、石舟斎に始まる柳生新陰流であった。多くの小説・物語が主題にしているのは、石舟斎から三代を経た頃までの柳生一族である。彼らこそが、後に歴史的人格として後代の人びとに影響を与えることになった人々である。本節では、柳生宗厳石舟斎・宗矩・十兵衛三厳・兵庫助利厳を中心にした柳生一族と柳生新陰流の歴史的展開をみてみたい。

1 戦国時代と柳生宗厳・石舟斎（1529 - 1606）

柳生の里に関する歴史的な記録は、7世紀の大化の改新の頃まで遡るが(山田 1971 : 3-4)、本稿の関心からすれば、戦国時代の柳生宗厳に始まる柳生新陰流と柳生一族が重要である。柳生一族に関する史料『玉栄拾遺』⁶⁾では、宗厳につながる柳生家の系譜関係が以下のように示されている。

柳生宗厳以前の柳生氏の系譜関係 (今村編1967 : 44-46 ; 今村1971 : 29-35から作成)



歴史的人格との出会い

柳生の里は、古く（平安時代）は藤原氏や春日社が所領する地域であった。鎌倉時代以降は、柳生氏の領地へと転換するが、その時期については判然としない。遅くとも14世紀までには、柳生の里は柳生氏の領地になっていた。14世紀以降の柳生の里をめぐる領有関係や柳生氏の政治的立場については、『玉栄拾遺』によって知ることができる。

「播磨守諱永珍 武林伝曰、永家菅原余裔也。世相続而領柳生庄。至後醍醐帝時 有故失其地」[今村編 1967:44]。（播磨守諱永珍 『武林伝』によると、永家菅原氏の後裔であり、代々柳生庄を領していたが、後醍醐天皇のときに領地を失った。）

柳生永珍が領地を失ったのは、後醍醐天皇と六波羅探題が戦った元弘の乱において、柳生氏が後醍醐天皇方についたのが理由である。建武の新政(1333年)によって領地を回復するが、戦国時代になると、柳生の里をめぐる領有関係は再び不安定なものになる。戦乱の状況の中で揺れ動いた柳生氏の動向を、今村嘉雄[1971]の記述に従って整理すると、次表のようになる。

戦乱中の柳生氏（今村[1971:28-37]の記述から作成）

年代	敵対状況	柳生氏の立場	戦乱の結果	戦乱の影響
1331（元弘の乱）	後醍醐天皇/六波羅探題	永珍・中坊源専（後醍醐方）	敗戦	領地没収（建武の新政により回復）
15世紀初期	南北朝	道永（中立）		
1467-1478（応仁の乱）	細川勝元/山名宗全	家宗（細川方）	勝戦	戦死
15世紀中期-16世紀初期	細川高国/三好元長	光家（細川方）	敗戦	戦死
1541-1544	木津左京亮長政・木沢氏/三好氏・筒井氏	家厳（長政・木沢氏方）	敗戦	家厳（48歳）と宗厳（18歳）は筒井氏の配下となる。
1559	筒井氏/松永氏	宗厳（筒井方）	勝戦	
1559-1563	松永氏/筒井氏	宗厳（松永氏方）	勝戦	
1568	織田信長・足利義昭/松永氏	宗厳（織田・足利方）	勝戦	
1571	松永氏/筒井氏	宗厳・厳勝（松永氏方）	敗戦	厳勝負傷。
1582-	太閤検地により隠し田が露呈し、領地没収。			
1600（関が原の戦い）	徳川家康/石田三成	宗矩（徳川方）	勝戦	没収されていた領地を回復。

戦国時代の柳生氏は、勝戦と敗戦を繰り返す中で、敵の配下に下ったり、味方と敵対関係になるといった経験をした。例えば、筒井氏に敗れた1541

年の戦以降、柳生氏は筒井氏の配下となったが、1559年から1563年の戦乱では筒井氏を敵に回して松永氏につき、さらに1568年の戦では織田・足利方について松永氏と敵対した。また、1571年の戦では再び松永氏の味方となった。「昨日の友は今日の敵」ともいうべき混乱した状況の中で、柳生氏と柳生の里の関係は不安定ながらも何とか維持された。戦国時代末期に生きた柳生宗厳は、このような混沌とした戦乱の状況の中で武将としての名を誇るようになっていた[今村1971:45-46]。

柳生宗厳(石舟斎)は、二転三転する戦乱の状況に翻弄されながらも、剣の修練に励んでいた。宗厳が父家厳と共に筒井氏の配下になったのは、17歳の頃であった。後の柳生氏に決定的な影響を与えることになる出来事がその頃に起きた。それは、興福寺宝蔵院胤栄の仲介で宗厳が上州(現群馬県)の上泉伊勢守秀綱と仕合をする機会を得たことである。仕合は、宗厳の惨敗に終わった。しかし、それがきっかけとなって、宗厳は、上泉伊勢守の弟子になった。その後、永禄6(1563)年からその翌年にかけて、上泉伊勢守は柳生の里に逗留し、宗厳は彼から武術を学ぶことになる[山田1971:16-20]。そうやって受け継いだのが、柳生新陰流である。上泉伊勢守秀綱の弟子になってから10年後(1573年)、足利氏の滅亡を期に、宗厳は、柳生谷に閑居したといわれる。45歳のときであった[今村1971:47-48]。さらにその20年後(1593年)、宗厳は髪をおろして但馬入道石舟斎宗厳を名乗るようになった。晩年の宗厳は、武将としての歴史の表舞台から下りたことになったが、彼が上泉伊勢守秀綱から受け継いだ兵法は、柳生新陰流として彼の子や孫に継承されることになった。

2 柳生宗矩(1571-1646)

宗厳が入道した翌年の1594年、宗厳は徳川家康と初めて会った。この局面が、後の柳生一族の政治的な展開の嚆矢となる。徳川家康は宗厳の兵法の卓越さに感動し、宗厳に勤仕を命じたのだが、宗厳は高齢という理由でそれを断り、同行した又右衛門(宗矩)を家康の幕下に入れてくれるように頼み、それが受け入れられた。後に宗矩は関ヶ原の戦で功績をあげ、家康は、太閤

検地の際に没収されていた旧領二千石を宗矩にそっくり与えることになる [今村 1971 : 50 - 53]。

宗矩は引き続いて家康の下で、大阪冬の陣 (1614 年)、大阪夏の陣 (1615 年) で功績を積んだ。また、秀忠や家光の兵法師範も勤めるようになった (1601 年、1621 年)。このような出世に伴ってしだいに所領が増えていき、ついに、1636 年、宗矩の所領は一万石に達して大名の列に加わった [今村 1971 : 115 - 119]。その後、宗矩を始祖とする江戸柳生家は、柳生藩を所領する大名として江戸時代を通じて続くことになる。

宗矩は、父石舟斎と共に柳生新陰流の創始者でもある。宗矩は、『兵法家伝書』(1632) という書物を著し、現在は岩波文庫として刊行されている。これは、後に紹介する柳生の里にある芳徳寺の橋本定芳住職に大きな影響を与えることになる書物でもあった。

3 柳生十兵衛三厳 (1607 - 1650)

柳生一族の中で宗矩の長男十兵衛三厳は、波乱万丈の生涯を送った剣豪として、古くは江戸時代後期の『柳荒美談』にとりあげられ、近年に至るまで小説やドラマの主人公として繰り返し注目されてきた。十兵衛は、柳生一族の中でもっとも多く小説や映画・ドラマの主人公としてとりあげられている。

十兵衛三厳は、祖父石舟斎が亡くなった翌年の慶長 12 (1607) 年、宗矩 (37 歳) の長男として柳生の庄に生れた。元和 5 (1619) 年、13 歳のときに後に将軍となる家光 (16 歳) の小姓として出仕した。しかし、出仕後 4 年目の寛永 3 (1626) 年、将軍の勘気に触れて官職を解かれることになる [今村 1971 : 233 - 234、今村編 1967 : 81]。十兵衛による『月之抄』では「さることありて、君の御前を退て」とのみ記し、官職を追われた具体的な理由は不明である [今村 1971 : 234]。

『玉栄拾遺』にも、わけあって相模国小田原に配流され、その後、武蔵国八幡山や山城国梅谷で山賊を懲らしめたことなどのエピソードが記されている。ただし、「未だ其の証を見ず」としており、史実として記録ではないこ

とは留意する必要がある [今村編 1967 : 81]。『村史柳生のさと』では、十兵衛が20歳のときから10年近く、「京都から山陽道を西に行き、九州地方をまわって引き返し、山陰から北陸地方を歩いている」と具体的に「諸国漫遊」の道程を示した上で、その目的については「寛永九年（1632）父宗矩が、惣目付の職に就いていることから考えて、その目的はほぼ推測される」と述べて、十兵衛が諜報活動をしていたことをほのめかしている。また、長旅を終えた後、十兵衛は、柳生の庄に道場を開いて、1万3千5百人に及ぶ門弟を指導したともいわれている [柳生村史編集委員会編 1961 : 45]。

今村嘉雄は、十兵衛の諸国漫遊説に異論を挟んでいる。今村は、12年もの間十兵衛が諸国を漫遊していたとすれば、柳生の庄に帰ってからわずか2年間で1万3千人余りの門弟を指導したことになり、それは現実的ではないと指摘し、さらに、『月之抄』に基づいて、將軍の側を離れてから12年間はほとんど柳生の庄を離れておらず、柳生の庄の道場を中心にして兵法の実技と理論の研鑽に没頭したと指摘している [今村 1971 : 238]。家光に致仕されてから後の14年間で1万3千人余りの門弟に兵法を指導したとみるほうが説得力があるというわけである。

十兵衛が家光に官職を取り上げられてから許されるまでの十数年間の動静が具体的にわかる資料は得られていないが、ここでは、柳生の庄に道場（正木坂道場）を開き、多くの門弟を育て、『月之抄』（1642-1643）、『昔飛衛といふ者あり』（1637）、『武蔵野』（1649）といった兵法の思想と技術に関する著作を残したという事実注目したい。正木坂道場は、十兵衛が活躍した時代から300年余り後の1963年、芳徳寺前住職の橋本定芳氏の尽力によって再建されることになる。また、十兵衛の著作は、父宗矩の著作とともに現在も実践的に読まれている。これらの著作を通じて、十兵衛の新陰流を学び、実践する人びとがいるのである。十兵衛の武道の思想と技術は、300年以上の時間を越えて現代に影響を与え続けている。

4 柳生兵庫助利厳（1579 - 1650）

柳生一族の活躍は、宗矩と十兵衛の親子に限ったことではなかった。1571

歴史的な人格との出会い

年の筒井氏と松永氏の戦いにおいて負傷した宗厳の長男厳勝は、その後の生涯を柳生の里で過ごし、武将として活躍することはなかったが、彼の息子兵庫助利厳（宗矩の甥）は、優れた兵法家として活動の舞台を広げていくことになる。

兵庫助利厳は柳生谷で生れ、幼少の頃から石舟斎の下で剣術修行に励んだ。石舟斎は、彼の才覚を高く評価していたといわれる。彼の剣豪ぶりは周囲にも知られるものとなり、加藤清正の要請により熊本藩士（500石）となった。利厳が柳生谷を離れる際、石舟斎は「新陰流兵法目録事一太刀目録」を授けた。しかし、利厳はわずか1年足らずで加藤家を去り、12年間の浪人生活の後、1615年利厳37歳のときに尾州徳川義直に仕えるようになった。それから5年後の1620年、利厳は義直に新陰流の印可を与えた[今村1971:275-280]。

それ以来柳生新陰流は、尾張柳生家と尾張徳川家の間で交互に相伝されていった。柳生会のホームページでは、代々の新陰流の伝承者を次表のように紹介している⁷⁾。

尾張柳生家における柳生新陰流兵法の相伝

流祖		上泉伊勢守 藤原信綱	第十一世	第八代	柳生兵助 平厳春
第二世	剣の柳生大祖	柳生但馬守 平宗厳(石舟斎)	第十二世		尾張宰相中將 源治行
	第二代	柳生新次郎 平厳勝	第十三世	第九代	柳生又右衛門 平厳之
第三世	第三代 尾張柳生始祖	柳生兵庫助 平利厳(如雲斎)	第十四世	第十代	柳生兵助 平厳久
	第四代	柳生茂左衛門 平利方(如流斎)	第十五世		尾張権大納言 源斉朝
第四世		尾張権大納言 源義直	第十六世	第十一代	柳生新六 平厳政
第五世	第五代	柳生兵庫 平厳包(連也)	第十七世	第十二代	柳生忠次郎 平厳蕃
第六世		尾張権大納言 源光友	第十八世		尾張権大納言 源慶恕
第七世		尾張権中納言 源綱誠	第十九世	第十三代	柳生三五郎 平厳周
第八世	第六代	柳生兵庫 平厳延	第二十世	第十四代	柳生金治 平厳長
第九世		尾張権中納言 源吉通	第二十一世	第十五代	柳生延春 平厳道
第十世	第七代	柳生六郎兵衛 平厳儔	第二十二世	第十六代	柳生耕一 平厳信

「世」と「代」の違いは、「世」が印可の相伝がなされた全ての人物に冠され

ているのに対して、「一子相伝」の原則で血統によって相伝された場合を「代」と呼んで区別している。「代」がついていない相伝者は、尾張徳川家の当主で尾張藩大名である。尾張柳生家における柳生新陰流は、尾張藩の制度に組み入れられることによって、安定的に伝承されていったといえる。

5 近代の江戸柳生家と尾張柳生家

宗矩を初代とする江戸柳生家は、初代宗矩から四代宗在まで、将軍の師範を勤めた。二代将軍秀忠から六代将軍家宣までの間である。しかし、十一代将軍家斎以後は、将軍の相手を命ぜられる程度になり、次第にその実力も衰えていったといわれる [今村 1971 : 271]。これに対して、兵庫助利厳を初代とする尾張柳生家では、尾張徳川家の庇護もあって、江戸時代を通じて新陰流が相伝され、近代以降も現在に至るまで実践されている。

尾張柳生家の現在の当主柳生耕一氏によると、尾張藩最後の兵法師範厳周とその子厳長は、宮内省濟寧館に出仕して、新陰流の伝授活動を行ったり、近衛師団に出向し将校たちに新陰流を教えた。また、1913（大正2）年には、尾張柳生家の血縁者で台湾銀行の頭取だった柳生一義氏の出資によって、東京牛込に柳生新陰流道場碧榕館が建立された⁸⁾。



柳生一族の墓（芳徳寺）

Ⅳ 武道と社会

1 芳徳寺の再興と武道の復興：橋本定芳氏（1891 - 1972）の足跡

柳生町にある芳徳寺は、柳生宗矩が父石舟斎の供養のために創建したものであり、江戸柳生家の菩提寺である。芳徳寺は、江戸時代を通じて柳生下村を所領していたが、いつの頃からか無住の寺と化していた。1926（大正15）年、岡山県出身の絵師橋本定芳氏が柳生の里を訪れ、芳徳寺に住持するようになった。橋本氏は、当時僧籍を持っていなかったため、石田武士氏の祖父らが芳徳寺の本山である大徳寺にかけあって橋本氏の副住職就任を強く推薦したという。芳徳寺に住むようになった橋本氏は、すぐに道場（現在の正木坂道場の前身）の建設に取り組んだ。

1931（昭和6）年に橋本氏は道場建設の趣意書⁹⁾を作成し、357人の署名を集めた。趣意書に書かれた署名は、政界や財界などの著名な人物が並んでいる。まず筆頭は、陸軍の幹部で当時は朝鮮総督を務めていた「宇垣一成」であり、最後は作家の「山岡荘八」で終わっている。橋本氏が、幅広い交友関係をもっていたことがわかる。また、芳徳寺再興のために橋本氏が集めた寄付金は100円にのぼった。こうして、道場建設のための資金の目途が立つと、橋本氏は、陸軍の歩兵部隊（石川隊）約100名の協力を得て道場建設に着手した。こうして1939（昭和14）年、芳徳寺本堂の傍（現在の資料室）に柳生道場が完成した¹⁰⁾。

道場建設の準備のために奔走しながら、橋本氏は、1928（昭和3）年に柳生剣聖会を結成した。剣聖会の初代会長は、江戸柳生家14代目当主で陸軍大佐と貴族院議員でもあった柳生俊久氏が務めた。剣聖会は、武道に関する出版物も刊行した。『武士道要覧』[1933]、『柳生の葉』[1933]、『鑑』[1939]、『窓の日ざし』[1945]などである。これらは全て橋本氏が執筆した。彼の柳生新陰流への思いは強かったが、剣聖会は柳生新陰流ではなく、剣道の実践グループであった。地域社会の外部との交流もあり、例えば、1937（昭和12）年には、陸軍大佐池田新吉が剣道の指導のために柳生を訪れたことがあった。しかし、1945（昭和20）年、敗戦の年に剣聖会は解散し、柳生道場も閉鎖することになった¹¹⁾。剣聖会の活動は、日本全体が戦時体制に向かう

状況の中で始まり、敗戦と共に終わったといえる。

しかし、橋本氏の活動は戦後も衰えることはなかった。戦後しばらくの間は、GHQの指令により剣道は廃止され、占領状態が終わる1952（昭和27）年まで剣道の活動は全国的に許されていなかった¹²⁾。剣道解禁の翌年（1953年）には、橋本氏は、正木坂剣聖道場の建設を決意した¹³⁾。旧奈良地方裁判所庁舎の払い下げを受けて材料を入手するなどの工夫をしながら、1959（昭和34）年に着工し、1963（昭和38）年に正木坂剣聖道場は完成・開設した。同年、奈良講武会・柳生剣道会・田原剣道クラブ・狭川剣道会・大柳生剣道会の5団体からなる奈良市剣道連盟が結成された¹⁴⁾。このように戦後の剣道復興が実現すると、正木坂道場では、日本剣道連盟による高段者研修会が開かれるようになった。柳生の里は、全国レベルの剣道の中心となっていったのである。

橋本氏の一連の活動は、彼が武道に対する熱意・行動力・影響力・知識にあふれる人物であったことをよく示している。小説家の山岡荘八や五味康祐は、橋本氏によく会いに来ていた。石田武士氏は、橋本氏の存在がなければ、柳生一族を題材にした小説は生れなかったし、「春の坂道」もなかっただろう、そして今ほど柳生が有名になってはいなかっただろうと話してくれた。

橋本氏は1972年、81歳のときに亡くなり、その10年後の1982年には、妻比禎子氏編集による『橋本定芳追悼録』が刊行された。それは作家山岡荘八の序文ではじまり、延べ77名の追悼文が載せられている。観光協会が編集した『柳生の里』[2000]には、「柳生の里の恩人：故橋本定芳老師の人となりとその功績」として40ページ渡って記述されている。これらを通して、定芳氏の社会的影響力の大きさをみることができる。

2 近年の動き

① 剣聖会から剣友会へ

戦前に橋本定芳氏が創設した剣聖会は、戦後の柳生剣道会に引き継がれ、さらに剣友会に名称を変えた。剣友会の活動内容は、柳生新陰流ではなく剣道である。石舟斎の命日に行なわれる石舟斎奉納剣道大会は、剣聖会時代以

論文

来継続的に行なわれている行事である。現在は、奈良市教育委員会と柳生地区連合会から経済的な援助を受けて、正木坂道場で、奈良県内の各道場と交流試合を行なっている。2009年の大会は69回目であった。

剣友会は、当初は成人自らが剣道を稽古するグループだったが、1970年頃からは、小中学生に剣道を教えることが活動の中心になった。2009年2月現在、剣友会の剣道の稽古には15人の小学生が参加している。毎週火曜日と木曜日の午後7時から8時30分まで、柳生中学校の武道場で稽古を行なっている。

剣友会の持続的な活動の成果は、柳生中学校剣道部の実績に表われている。柳生中学校は生徒数28名（2009年現在）の小さな学校であるが、そのうち10名が剣道部に所属している。過去、多くの部員が全国大会に出場を果たしている。例えば、柳生町で旅館を営む久保田氏は、柳生の子どもたちと剣道の関係について次のように述べている。小学校・中学校では、「木剣体操」を毎週月曜日の朝礼で行なっている。娘（1979年生まれ）は、小学校3年生のときに剣道を始め、大学生になるまで続けた。中学生のときには、柳生で初めて全国中学校総合体育大会に出場し、その後、インターハイや国体の選手にもなった。息子（1978年生まれ）は、小学校から高校まで剣道し、現在は剣友会の活動に参加し、子どもたちを指導している。

剣友会の持続的な子どもたちへの指導は、「剣道の柳生」という近隣の地域の人びとのイメージを強めている。筆者がインタビューした狭川（柳生の西に位置する）出身の20代の男性は、「柳生の子はみんな剣道している」というイメージがあると話してくれた。そのイメージの背景には、剣友会の持続的で地道な活動がある。

②柳生新陰流大和派道場から二蓋笠会へ

柳生新陰流大和派道場は、柳生地区邑地町出身の畑峯三郎氏が中心となって1972年に4人で結成した柳生新陰流を实践するグループである。畑峯氏は、名古屋の柳生会で新陰流を实践していた神戸金七氏に師事して新陰流を学んだ。

歴史的人格との出会い

神戸金七氏は、尾張柳生第十三代柳生宗厳周氏について新陰流を学んだ人物であり、芳徳寺の橋本定芳氏とも親交があった。昭和30年代には、神戸氏は、名古屋から柳生の里をたびたび訪れて、新陰流の指導していた。畑峯氏は、橋本住職の勧めにより神戸氏に師事し、名古屋の道場・春風館まで通うようになった。その頃の様子を、畑峯氏は、二蓋笠会の会報『柳生新陰』で次のように述べている。

「老師（橋本住職）と共に江戸柳生流はあくまでも大和柳生のものであると共鳴され、貴重な武技と生涯を、名古屋の片隅で大和柳生を見守って下さる神戸金七先生の下に、仕事の合間々々に、と言ってもお盆の休み、藪入り休み、春秋一回程度の合間を利用してご指導を受けたものである。

名古屋到着は午前十一時過ぎ、午後一時過ぎから先生に直接の指導で五時頃まで、六時過ぎから加藤社長（春風館館長）はじめお弟子衆の皆様と九時頃まで、社長夫人の夕食を戴いて十二時頃までは老先生の柳生について、又は古文書についての講義を拝聴し、朝は五時に起き、そつと一人で道場で昨日昨夜の復習を八時までやり、朝食を戴いて帰路につく日課が三、四年は続けた事を記憶している。

その都度、加藤社長は家族同様に接待下された事を思えば、本当に未熟ながらも本会が今日在るのも神戸先生はじめ加藤社長御一家の御指導、御支援の賜である事を私は忘れる事は出来ない」¹⁵⁾。

そうやって新陰流を学んだ畑峯三郎氏が有志3名と共に発足したのが、柳生新陰流大和派道場である。発足当初は、京都府相楽郡南山城村高尾（旧柳生藩領）の製茶工場で活動していた。その後、柳生の里内外でメンバーが増えていき、名称を二蓋笠会¹⁶⁾に変えて、会則（「柳生新陰流二蓋笠会会則」）をつくり組織として整備されていった。「会則」では二蓋笠会の目的を「柳生江戸形の伝統を保持継承し、柳生十兵衛三厳の『月の抄』を基本に柳生流に生きる精神と技を後世に伝えと共に実技の部・資料柳生流研究の部の二部をもって構成する」としている。

2008年9月現在、35名のメンバーが二蓋笠会に所属している。現在の活動は、奈良（奈良市若草公民館佐保分館・富雄中学校武道場）と大阪（株式

論文

会社クボタ体育館)を拠点に定期的に稽古を行なっている。不定期ではあるが、柳生地区の中学生に指導も行なっている。

③柳生会

柳生会は、尾張柳生家の当主を中心に活動している柳生新陰流の実践グループである。尾張柳生家における柳生新陰流の歴史的な展開過程は、Ⅲ-4、5で述べた通りである。現在の尾張柳生家の当主で、かつ柳生会の主宰者は、柳生耕一氏である。耕一氏は、2006年に先代の柳生延春氏より印可を授けられて、第22世・第16代の柳生新陰流の相伝者となった。

現在、柳生会は、尾張柳生家のある名古屋を中心として活動しているが、支部として、東京柳生会、安城柳生会、関西柳生会、広島柳生会、柳生会USAがある。支部のメンバーは、1週間に1度のペースで稽古をしており、ニューヨークを除けば1ヶ月に1度の頻度で柳生耕一氏が指導に赴いている。

2008年夏、筆者は、関西柳生会の稽古の様子を観察する機会を得た。耕一氏を含めて21名が、大阪豊中市にある武道館ひびきに集まった。稽古は午後1時より5時頃まで続いた。多くのメンバーが二人一組になって袋竹刀で打ち合う稽古をしていたが、数名のメンバーは日本刀での居合抜きの稽古をしていた。

稽古が終わると、午後6時から、柳生新陰流兵法に関する理論的な講義が行なわれた。そこで、耕一氏は、筆者をメンバーに紹介してくれた。その前に一度名古屋でインタビューを行なっていて、私が武道について全く何の知識も持っていないことを知っていた彼は、メンバーに、「玉城さんは武道のことは何にも知らないんです。でも、だからいいのです。武道のことを知らない人が我々の活動を見て、何か感じるものがあるとすれば、面白いことです。本当のことは伝わるものです」と紹介した。

講義が終わると、近くの居酒屋で飲み会となった。メンバーの何人かが、柳生会への入会のきっかけなどを気さくに話してくれた。例えば、メンバーの一人は、20代前半のアメリカ人男性であった。彼は、3年前にニューヨー

歴史的人格との出会い

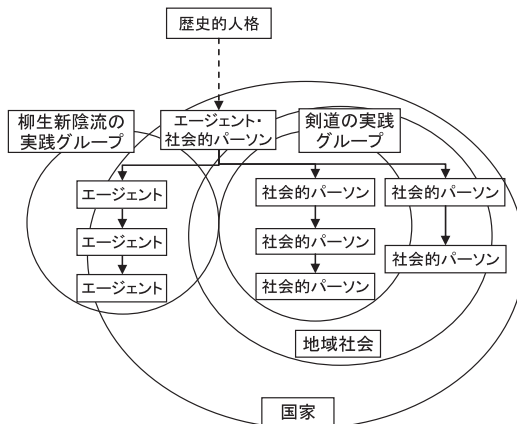
クで柳生新陰流の存在を知り、2年前に新陰流を学ぶために来日したという。また、別のメンバーは、あるテレビ番組で柳生新陰流が紹介されているのを見たことがきっかけで、「正統な先生」に習いたいと思い、本で調べて柳生会に入会したという。

関西柳生会のメンバーは、柳生新陰流とその師である柳生耕一氏に対して、尊敬の念を抱いていることが彼らの立ち居振る舞いにおいて表われていた。彼らの言動がとても謙虚なのである。そこには「正統性」を強く主張しようとする硬さはなく、柔軟で自然な態度の中にじみ出てくるような自信ともいべきものがあるように感じた。耕一氏の「本当ことは伝わるものです」という柔軟でありながら毅然とした態度にそれがよく表われている。彼の自信は、自分自身が優れていることを誇ろうとするものではなく、彼が受け継いだ柳生新陰流が「本当のこと」だと受け止めたところからくる自信だと思われた。

V 歴史的人格とネットワークの形成

1 歴史的人格とエージェント

柳生宗厳・宗矩・十兵衛三厳・兵庫助利厳を中心に形成された柳生新陰流は、時代を超えて具体的な人によって受け継がれ、社会に対して一定の影響を与えてきた。これまでの記述からそのように結論づけることができる。これを図示すれば次のようになる。



柳生の里における歴史的人格と現在に生きる人々関係を考える上で、芳徳寺の橋本定芳氏の活動は示唆に富んでいるように思われる。岡山県出身の彼は、柳生に移り住んで無住だった芳徳寺を再興し、剣聖会の創設・柳生に関する本の刊行・正木坂道場の建設・福祉施設の成美学寮の創設など、多岐に渡る社会的な活動を実践していった。彼の社会的行為の背景、あるいは種々の行為を促していく思想として柳生新陰流があった。彼は、歴史的人格との出会いから、主体的に行為する人（「エージェント（主体的媒介・代理人）」）となったとみることができる。

「エージェント」の概念は、田中雅一 [2006] に依拠している。田中は、ジュディス・バトラーのエージェント論を批判的に検討した上で、エイジェンシーを「広い意味でのコミュニケーション能力」と捉えている [田中 2006 : 17]。

「代理（エージェントの訳語 [筆者注]）」は、他者の操り人形という意味ではなく、コミュニケーションの対象となるような他者との共同性あるはネットワークを示唆する存在、私の存在が他者との関係に埋め込まれている、しかし、一方的な主従の関係にあるのではないようなあり方なのである。コミュニケーションが個別的、一対一であるとしても、なおそこには双方向的、相互交渉的な場—共同性—が生まれる。そのような場の存在を示唆し、そのような場を生み出し、さらに変化させる力がエイジェンシーである」 [田中 2006 : 17]。

端的に言えば、エージェントとは、他者との関係を前提にして主体的に行為する人の様相を指す分析概念である¹⁷⁾。橋本氏の場合、歴史的人格を重要な他者として見出し、歴史的人格に刺激・誘発されて諸々の主体的活動を行なったとみることができる。

橋本定芳氏と歴史的人格との出会いは、『兵法家伝書』（柳生宗矩 1632）や、沢庵和尚が宗矩に授けたといわれる『不動智神妙録』などの書物を通してであった¹⁸⁾。橋本氏は、生きた人からではなく書物を通して歴史的人格に出会ったのである（歴史的人格----→エージェント）。この出会いは、次の出会いと繋がっていった。例えば、柳生新陰流大和派道場の創始者である畑峰三郎氏がその一人である。畑峰氏は、二蓋笠会の会報『柳生新陰』に次の文章を書

いている。

「地元にも柳生の表看板たる古武道柳生新陰流の再起の必要性を認識された先代橋本定芳老師が此の再現にあらゆる努力をされたが、残念ながら其の技の実現は見られなかった。老師が流の再現にかけられた最後の言葉は『春の坂道』（NHK大河ドラマ）が放映されている年（昭和46年）の秋のある日と思うが、『柳生の臍の道場の見通しは立ち、理想も大体は出来たが、真となる流儀はついに見る事は出来なんだ。畑峯君、わしゃもう柳生流は諦めたよ。』と、つぶやく如くに話された。其の言葉の力無さ、あのお顔、今にも消える如く感じた肩先が、今尚私の脳裏には消す事は出来ない」¹⁹⁾。

畑峯氏が新陰流大和派道場の結成において中心的な役割を果たしたことは既述したが、畑峯氏の実践の背景には、師としての橋本氏が存在していた（エージェント→エージェント）。

人と人の出会いの連鎖はさらに続いた。例えば、新陰流の実践者で、長谷川流棒術²⁰⁾の実践者でもある柳生下町の市場富美子氏は、畑峯氏が柳生新陰流の稽古に通う様子がとても印象深いものだったと語っている。市場氏は、畑峯氏が彼女の家の前を、バイクに大きな荷物をのせて走っていくのをたびたび見ていた。暑い夏も寒い冬も定期的にどこかに通っている様子だが、一体どこに何をしに行っているのだろうかと思議に思っていた。後になって、畑峯氏が新陰流の稽古のために名古屋に通っていたことを知ると、新陰流はとても大事なものだと思うようになったという。市場氏は30歳くらいから、地域の婦人会で長谷川流棒術の稽古をしていたが、40歳の頃から、畑峯氏の勧めにより、新陰流の薙刀の稽古に取り組むようになった。市場氏にとって、武道の実践へと駆り立てた動機として、畑峯氏との出会いは大きなものだった（エージェント→エージェント）。このようにして、人と人の出会いが連鎖して、新たな人（エージェント）が生まれ、人（エージェント）のネットワークが形成されていった²¹⁾。

2 エージェントと社会的パーソン

橋本定芳氏の活動は、道場建設・武道に関する本の執筆・剣聖会の結成・

福祉施設成美学寮の創設など、多岐に渡っており、「柳生の里の恩人」と呼ばれていることは既述したとおりである。橋本氏は、地域社会における重要な「社会的パーソン」でもあったといえる。

「社会的パーソン」とは、社会的に規定・期待される「役職・役割」としての人の側面を指す概念である [Fortes1987]。人を捉える上で「パーソン(人格)」と「セルフ(自己)」を対立的に捉えて、前者を社会的に規定された個人のあり方とし、後者を「パーソン」の担い手としての個人とするモデルは、人類学において、マルセル・モースの先駆的研究 [モース 1995 (1938)] 以降、繰り返し議論されてきた。この対立モデルの有効性について論じる余裕はないが、ここでは、「パーソン」と対比的に措程される「自己」の非社会性が批判されることはあっても、パーソンを社会的に規定された人の側面とする見解については、多くの論者が認めていることに留意しておきたい [cf. 中川 2001] ²²⁾。

そこで問題になることは、「社会的パーソン」と「エージェント」の違いである。既述したように「エージェント」とは「他者との関係に埋め込まれている」人のあり方であり、社会と乖離した個人を意味するわけではない。「エージェント」と「パーソン」は両者とも他者との関係を前提にしているという点においては共通している。両者の違いは、「エージェント」が特定の他者との関係において定立されるものであるのに対して、「パーソン」は、特定の時代の特定の地域社会や国家における一般的な規範=文化によって規定・期待される人のあり方とみておきたい。

橋本定芳氏の活動でいえば、彼が戦前と戦後の二つの時期に建立した二つの道場は、柳生新陰流の道場ではなく、剣道のためのものであった。また、戦前の剣聖会や戦後の剣友会も近代剣道のグループである。これらのことが示しているのは、柳生新陰流よりも剣道の方が時代の一般的な状況に適合的だったことである。だからこそ、地域社会のレベルを超えたレベルの協力を得ることができたし(道場建設のための寄付金や陸軍の協力)、「柳生の里の恩人」と地域社会レベルで顕彰されることにもなったといえる。

「エージェント」と「パーソン」という二つの人のあり方は、二蓋笠会と

歴史的人格との出会い

剣友会という二つのグループのあり方にもみることができる。二蓋笠会の創始者畑峯氏が目指したのは、柳生新陰流の<一般的>な普及ではなく、あくまでも柳生新陰流を自ら会得し継承することと、次なる人に伝承することであった。これに対して、剣友会の活動は、地域社会の子どもたちに剣道を教えることである。この場合、活動の目的は個人的な修練というよりも地域社会の環境整備や青少年育成という意味合いが強い。彼らは地域社会の一員としての社会的役割を積極的に担っているのである。ただし、急いで付け加えなければならないことは、エージェントとしての人の実践が社会に無関心だというわけではなく、また、社会的パーソンとしての人の実践にも個人の修養という側面がないわけではないことである。二蓋笠会のメンバーは柳生中学校で柳生新陰流を指導する活動を行っており、剣友会のメンバーも自らが剣道の実践者である。両者の違いは、活動の内容や結果の違いではなく、目指している方向性の違いとみることもできる。実践の内容としては、両者とも個人的でもあり社会的でもある²³⁾。

3 歴史的人格と柳生の里

歴史的人格は、メディアを通じて社会・文化的表象として広く社会に普及されるという一面がある。柳生一族の場合、NHKの大河ドラマ「春の坂道」(1971年)の放映が決定的な普及の契機であった。「春の坂道」は、山岡荘八の小説『春の坂道』と『徳川家康』を原作として、中村錦之助扮する柳生宗矩の生涯を戦国時代末期から江戸時代初期の時代を背景に描かれたドラマである。このドラマの柳生の里への影響は大きかった。柳生観光協会会長の増田勝男氏は、ドラマ放映当時の様子について次のように振り返っている。

「昭和46年に『春の坂道』が放映されてから、柳生は何万人という観光客で溢れかえるようになった。泊客も多く、民宿が10件稼働していた。このような状況は、昭和46年から3、4年続いた。観光客の主な目的地は、家老屋敷と芳徳寺だった。観光客の増加に伴いゴミ問題が発生し、要所要所にゴミ箱を設置したが、それでも追いつかなかった」²⁴⁾。

多くの観光客を迎えて、観光客向けの店舗も増えた。石田武士氏は、「春

論文

の坂道」放映の前年（1970年）から3年間に渡って、柳生町と柳生下町における店舗数を次のように記録している。

柳生町・柳生下町店舗調べ(石田武士)

	1970年	1971年	1972年
雑貨店	3	3	2
飲食店	1	8	3
土産物屋	0	12	0
魚屋	2	2	2
すし屋	1	1	1
たばこ店	2	2	2
簡易旅館	0	1	0
剣道具店	1	1	1
駐車場	0	6	2
民宿	8	8	8
表具店	2	2	2
合計	20	46	23

『柳生古語拾遺』pp.226-227、242-243、259-261

わずか1年の間に、観光客向けの店舗は2倍以上に増えたが、持続はしなかった。春の坂道以降3、4年間は、その影響力の余韻があったが、ピークは放映された1971年の1年間だった。石田武士氏は、「柳生ブーム」について次のように記している。

「春の坂道に始まり、春の坂道に終る。柳生ブームに振り回された、柳生の人びとであった。静かな柳生に、交通渋滞が春の彼岸にあり、奈良警察本署より応援というさわぎが、柳生始まって以来の出来事があった」（『柳生古語拾遺2』pp.243-244）。

社会・文化的表象としての歴史的人格は、一般的な観光客を惹きつける魅力があり、地域社会に実利をもたらすものであった。しかし、石田氏が「柳生ブーム」と述べているように、持続性に乏しかった。ここが、武術の実践者たちと歴史的人格の関係と大きく異なっている点である。つまり、社会・文化的表象としての歴史的人格は、一般的に普及するだけの影響力をもっているのに対して、実在した人としての歴史的人格は、現在を生きる人を通して持続的に歴史生成を刺激・誘発する。前者の影響力を<一般的・空間的影響力>、後者を<普遍志向的・時間的な影響力>と呼ぶことができる²⁵⁾。

Ⅵ おわりに

柳生新陰流の歴史の内容は、人と人の出合いの連鎖とみることができる。

歴史的人格との出会い

このことは近年のことだけでなく、石舟斎の時代からみられたことである。柳生新陰流は、石舟斎が発明したのではなく、上泉伊勢守秀綱から受け継いだものであった。その後も、宗矩・十兵衛・兵庫助らが受け継ぎ、尾張柳生家においては、江戸時代以来現在まで絶えることなく伝承されてきた。柳生の里では、橋本定芳氏の大きな働きで近代に復興された。現在の柳生新陰流の実践者たちは、これらの人々に連なっている。柳生新陰流の歴史は、歴史的人格を起点とする人と人の出会いが連鎖することによって生成されてきた過程とみることができる。その一方で、歴史的人格は、メディアによって表象されて一般的によく知られるようになったという一面ももっている。小説がきっかけで柳生新陰流の実践を始めた人も存在しており、この場合、小説を通して歴史的人格に出会ったといえるが、そのような人は少数であり、多くの人々は歴史的人格を消費の対象としている。「春の坂道」による柳生ブームは、歴史的人格が社会・文化的表象として一般的な観光消費の対象になったよい例である。

過去の柳生一族と現在に生きる人々との2つの関わり方は、坂井信三[2009]が歴史的人格の「背理」と呼んだことに対応している。坂井によると、歴史的人格には「実在の存在者であると同時に事後的に構成された表象」という二面性があり、両者は背理の関係にあるという。

「『ひと』は、『社会』のコミュニケーション過程においては固有の人格性を除去されて、構成された表象としての歴史的人格になる。とはいえ『社会』が不可逆の歴史的变化の刻印を自らの上に認めるのは、やはり実在する存在者としての歴史的人格の記憶をとおしてのことである」[坂井 2009 : 28]。

坂井の議論は、歴史的人格の背理性を指摘することに目的があるのではなく、社会の場に歴史が生成することにおいて歴史的人格がもつ可能性を示すことにある。社会的につくられた存在（「構成された表象」）が社会変化を刺激・誘発する存在でもある、これをどう考えればよいのか、酒井はそう問うているのである。そこで、坂井は、歴史的人格の「ひと」としての側面を重視することになる。

「いま歴史的人格を語るという行為は、人々に自らが『ひと』であることを思い

出させ、『社会』が実はいつもずっと、ということはいまも現に、外部性にさらされているという事実を目を開かせることでもあるだろう。(中略) 歴史的人格は、語られることで『社会』の自己準拠的なオペレーションを経由しつつ同時にそのオペレーションからの逸脱の可能性を開くもの、すなわち『社会』というトポスに歴史が生成する不可欠の、また不可避の媒介者になっているのではないだろうか」[坂井 2009 : 29]²⁶⁾。

柳生新陰流の歴史を考える上でも有効である。柳生の事例から浮かび上がるのは、次のような状況である。歴史的人格や歴史的人格を背景にもつ人と出会った人は、その思想や技術の継承を目指して実践し、次なる人への伝承者となっていった。これが、歴史生成の媒介者=エージェントの姿である。その一方で、柳生新陰流の歴史を背景に持ちながらも、時代の状況によって剣道を選び、地域社会内部における青少年教育の活動を行ない、また、全国的にも剣道の中心としての柳生のイメージを形成するのに貢献する人々も存在していた。これは、時代・社会状況によって規定・期待される人としての社会的パーソンの姿である。ただし、エージェントと社会的パーソンは、人を分類するカテゴリーではなく、人にみられる二つ様相(modality)であることに留意したい。つまり、一人の人は、エージェントであると同時に社会的パーソンでもある (cf. 橋本定芳氏)²⁷⁾。

坂井の議論を本稿の文脈において読み替えれば、歴史生成における「ひと」がもつ可能性とは、普遍的な志向性をもつ特定の他者との邂逅によって生まれるエージェントの出現と、エージェントのネットワーク形成の可能性だといえる。それは人が社会的パーソンであることをやめることを意味しない。それどころか、歴史的人格との出会いによってエージェントとなった人が、社会的パーソンとしても大きな役割を果たすことは、橋本定芳氏の例がよく示している。柳生新陰流の歴史からみえてくる歴史的人格の可能性は、それと出会った人が歴史生成と社会再形成の担い手になるということである。歴史的人格と現在に生きる人々との出会いは、今・ここにおいて歴史生成・社会再形成が起こる可能性を孕んだ局面とみることができる。

謝辞

本稿は、2008年度奈良市委託事業柳生の観光振興に関する基礎調査〔安村・玉城2008〕と2009年度奈良県費共同研究（研究代表・玉城毅）における研究成果の一部である。調査においては、柳生地区観光協会と柳生地区連合会をはじめ、柳生地区の多くの方々にお世話になった。とりわけ、八坂神社宮司の石田武士氏には多くのご教示を受けた。また、柳生会の柳生耕一氏は、快くインタビューに応じて下さっただけでなく多くの資料を提供して頂いた。ご協力下さった方々に厚くお礼申し上げたい。

注

- 1) 歴史的人格を正面から扱っている研究に坂井信三〔2009〕がある。酒井は、歴史的人格を次のように定義づけている。「構造モデルの契機としての『ソーシャル・パースン』ではなく、社会から乖離し独自化した存在者としての個人でもない。それは伝承や記録に名前を残し、その行為と存在が大きな社会的・政治的意味をもった人物として記憶されている歴史的人格である。そうした歴史的人格は、伝承や記憶によって事後的に構成された面をもつという意味で、事実としての生を生きただけの個人と同一視できないが、しかしまたその人物の活動が社会に消すことのできない刻印を残したという意味では、決して表象上の構成物ではなく実在する存在者としての境位をもっている」〔坂井2009：2〕。坂井の議論については、「Ⅵ おわりに」で検討する。
- 2) 「Ⅱ」・「Ⅲ」・「Ⅳ」の記述は、安村・玉城2008『柳生の観光振興に関する基礎調査報告書』の一部を修正加筆したものである。
- 3) 柳生宗矩が一万石を所領して柳生藩が設置されたが、柳生藩の領地は、大和国添上郡・大和国山辺郡・山城国相楽郡に分かれて点在していた（『柳生家雑記録』）。
- 4) 柳生関係の文献はこれで網羅されているわけではない。“柳生”がタイトルに使われていなくても、その内容は、柳生一族を扱った作品があることを考慮しなければならない。例えば、多田容子のデビュー作『双眼』は柳生十兵衛を描いたものである。
- 5) この文献は、残念ながら公刊されていない。筆者は、石田氏の好意により閲覧させて頂いた。
- 6) 『玉榮拾遺』は江戸柳生家で伝えられてきた史料で全8巻よりなる。編者は18世紀中ごろに生きた柳生藩の家臣・萩原信之であり、史料の成立年代は宝暦年代（1751年～1763年）頃だと思われる。内容は、神代から宝暦3（1753年）までの柳生家の歴代当主と事跡を記したものであるが、古い時代の記録については、『春日社記』などの別の史料からの抜書きが目立っており、後の時代の記録は具

体的になっている。今村嘉雄が翻刻して『史料柳生新陰流上巻』に全文を載せている。

- 7) 「柳生新陰流の世界へようこそ」 (<http://yagyushinkage-ryu.jp/aisatsu.html>)
- 8) 2008年8月8日のインタビューによる。
- 9) 趣意書のコピーを石田武士氏に見せて頂いた。
- 10) 武道場建設に関わる橋本定芳氏の活動については、石田武士氏へのインタビューによる。石田氏は、高校生の頃から橋本氏に師事し、柳生の歴史や武道について薫陶を受けた。また、橋本定芳氏が収集した資料を活用して、独自に研究を続けている。
- 11) 石田武士『柳生古語拾遺』2
- 12) 岡田守方によると、戦前の剣道は、戦時社会体制の状況において「戦技剣道」と位置づけられ、戦後に復興した剣道は、「スポーツ剣道」と認識されるようになった〔岡田1981、1987〕。また、戦後の剣道は、昭和30年代には青少年教育の一環として政治主導で推進されるようになった〔岡田1982〕。
- 13) 石田武士『柳生古語拾遺』2、p.195
- 14) 石田武士『柳生古語拾遺』2、p.213
- 15) Web ページ「柳生新陰流兵法二蓋笠会」 (<http://yagyushinkageryu.com/top.html>)
- 16) 「二蓋笠」は江戸柳生家の家紋である。
- 17) エージェント・エージェンシーの概念は論者によって使い方が異なる。例えば、フォーテスの人格論〔Fortes 1987〕の延長線上に位置づけられるジャクソンとカーブの研究〔Jackson and Karp 1990〕では、社会的に規定されるパーソンを選択的に担う主体という意味でエージェントの概念が用いられている。田中によるエージェントの定義は、ルイ・アルチュセール―ジュディス・バトラーの理論的研究を批判的に検討することによって導かれたものである。
- 18) 石田武士氏のご教示による。
- 19) Web ページ「柳生新陰流兵法二蓋笠会」 (<http://yagyushinkageryu.com/top.html>)
- 20) 長谷川流棒術とは、柳生の里に伝わるもう一つの武道である。本稿は、柳生新陰流に記述と分析を限定しているために、長谷川流棒術については詳述しない。その概要については、安村・玉城〔2008〕を参照。
- 21) このことは、柳生新陰流大和派道場の発足から二蓋笠会への展開過程に顕著にみられる。また、調査が不十分なために詳説できないが、柳生会においても同様のプロセスがあることが予想される。ニューヨーク出身のアメリカ人が柳生新陰流を学ぶために来日したことはその一例だといえる。
- 22) 「一方に人格と自己を対立物と見なすモデルがある。『社会的』人格と『心理的』自己の差異を想定し、前者を人類学の対象とみなすか、あるいは、その上で両者の関係を考慮する。他方に、人格と自己の結びつき方の文化的多様性を追求するモデルがある。この立場は、対立モデルが想定する人格と自己の落差の普遍性を

歴史的人格との出会い

否定する。これら二つのモデルが提出された後の議論は、これらのモデルの修正と再定式化であった」[中川 2001: 192]。

- 23) 二蓋笠会と剣友会の方向性の違いは、それぞれの活動範囲の違いとしても表れている。前者が地域社会の枠を超えた活動であるのに対して、後者は地域社会の中で活動を重視するものである。二蓋笠会では、柳生の里において形成されたグループであるが、現在の主要なメンバーは奈良市街地に多く、定期的に稽古を行なっている場所も柳生の里ではない。これに対して、剣友会の活動は、地域社会の内部で行なわれている。
- 24) 増田氏へのインタビュー（2008年8月5日）。
- 25) 「普遍性」と「一般性」の区別は、柄谷行人[1989]と小田亮[2009]を参考にしている。
- 26) 坂井は、ルーマンの社会システム論を援用して、「ひと」と「社会」を互いに環境にあるような関係と捉え、両者は「相互浸透」によって関係するとみている[cf. ルーマン 1993]。
- 27) とはいっても、多くの場合、二つの様相は同じ頻度で表われるわけではない。人は誰でも現実を生きる社会的存在として社会的パーソンであることを求められる。しかし、特定の他者との邂逅がなければ一生涯の人であれ、書物を通してであれ一、エージェントとしての様相は表われにくい。

参考文献

今村嘉雄

1971『定本大和柳生一族：新陰流の系譜』新人物往来社。

岡田守方

1981「柔・剣道の禁止及び復活とその背景」『武道学研究』14-2, pp.25-26。

1982「現代武道観の一考察：戦後武道関係文献の検討を通して」『武道学研究』15-2, pp.25-26。

1987「剣道の歴史認識に関する研究：戦時剣道・禁止・復活をめぐる」『武道学研究』20-2, pp.5-6。

小田亮

「『二重社会』という視点とネオリベラリズム：生存のための日常的実践」『文化人類学』74/2:272-290。

柄谷行人

1989『探求Ⅱ』講談社。

酒井信三

2009「歴史の叙述と社会の記述：社会人類学における歴史的人格の位置づけをめぐって」『社会人類学年報』35:1-31。

田中雅一

2005 "Towards an Anthropology of Agency: Performativity and Community" Japanese Review of Cultural Anthropology.6:3-17.

論文

2006「序論：ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践：エイジェンシー／ネットワーク／身体』pp.1-37、世界思想社。

中川理

2001「人類学研究における人格と自己」『年報人間科学』22：191-208。

橋本比禎子

1977『橋本定芳追悼録』橋本比禎子。

モース、マルセル

1995(1938)「人間精神の一カテゴリー：人格(パーソン)の概念および自我の概念」『人というカテゴリー』紀伊国屋書店、pp15-56。

柳生観光協会編

2000『新版・柳生の里(花と剣聖の里)』柳生観光協会。

柳生村史編集委員会編

1961『柳生のさと 村史』奈良市柳生地区連合会。

安村克己・玉城毅

2008『柳生の観光振興に関する基礎調査報告書』奈良県立大学。

山田熊夫

1971『柳生の里』飛鳥書房。

ルーマン、ニクラス

1993『社会システム理論(上)』恒星社厚生閣

Fortes, Meyer

1987 “On the Concept of the Person among the Tallensi” in Religion, Morality and the Person: Essays on Tallensi Religion, pp.247-286. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press. Originally in La Notion de Personne en Afrique Noire. Paris: Colloques Internationaux du Centre National de la Recherche Scientifique, No. 544, 1973.

Jackson, Michael and Karp, Ivan

1990 “Introduction” in Jackson, M. and Karp, I. (eds.) Personhood and Agency: the Experience of Self and Other in African Culture. pp.15-30. Smithsonian Institution Press, Washington.

資料

石田武士

1965-1978『柳生古語拾遺』私家版

今村嘉雄編

1967『史料柳生新陰流(上巻)』人物往来社

杉田定一

1923-1926『柳生藩舊記；柳生氏六百年史；柳生の研究：古文書篇；古文書・古記録・遺物遺跡を基礎としたる柳生六百年史』私家版

歴史的な人格との出会い

「玉栄拾遺」[1751年～1763年] 今村嘉雄編 1967『史料柳生新陰流(上巻)』人物往来社所収。

『柳生家雑記録』[1727] (未公刊)。

『柳生雑記』[1730] (未公刊)。

『袖隠抄』[年代不明] (未公刊)。